黒い雨

嶐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
黒い雨

【Ｎコード】
Ｎ９５１４Ｚ

【作者名】
嶐

【あらすじ】
個人で冊子に投稿します

ジャンク。（前書き）

自ら、死を望むお客様へ。
えーっと、殺人鬼と、ネクロフィリアの二人ひと組で活動しております。
お気軽に、御相談下さい。精一杯可愛がりますよ。

ジャンク。

パンッ。

乾いた音がして、瞬間、
眼前が　真紅の霧につつまれる。

俺は、人を殺した。

罪悪感など、微塵もない。
変わり果てた目の前のソレを、軽く蹴ってみる。

小石を蹴るように。

そして、口元が歪む。
異常である。

「あぁ、儚いねぇ」
なんて、安上がりな言葉を肉塊に投げつけながら。

足早に、その場を立ち去る。

翌日、俺が人を殺めた路地裏が黄色い線で包囲された。

街の大型ＴＶは、けたたましく吼えたてる。
「昨日の事件は・・・」

すげーイラつく。

消えろよ、屑どもが。
お前らの言ってる事なんて、誰も聞いてねぇよ。

本当のことなんて隠蔽されてるんだろうが。
世の中に流れる情報なんてもんは、ほとんどが制限されてるんだよ。
それを鵜呑みにする？
テメェらさぁ・・・バカなんじゃないの？笑うわ。

カニバリズム。

ある廃病院にて。

「陸、おい陸！」

待合のソファに寝っ転がってゲームに打ち込んでる相方に声をかける。

「喘、あんまり怒ると、頭プッツンすよ～」

コイツの、間延びした声に腹が立つ。俺は、気が短いんだよ。

チャッチャと喋れや。

「聞いてんのか、糞餓鬼よォ！」

構わず怒鳴り返すと、かったるそうに首だけこっちに向けて、また

も間延びした声で、

「聞いてるって～怒んなよ～」ときた。

こいつ氏ね。まじで。

「死ねや」思わず本音が口から飛び出る。ヤッチマッタ。

世界一俺をイラつかせることだけに才能が長けた糞餓鬼は、

「うっわ、ひで～俺泣いちゃう～殺して～、殺してよォ！」と盛大な嘘泣きを始める。

これだよ。手に負えない。つか死ぬほどうざい。

「俺の事、糞餓鬼って言うけど～、喘だって立派なガキじゃん～！

そでしょ～」

あああああ、うっぜー黙れよおい。撃っちまうぞ！何が、そでしょ～、だ。

そんなに頭が水風船みたいに、グチャリてーのか。

我慢しきれなくなって、銃を向ける。４０口経は・・・人に向けちゃいけないんだよな・・・

ま、そんな事はどうでもいい。殺すためのモンだしな。

と、突然、獲物が跳ね起きた。嬉々とした表情を浮かべながら、

「喘！俺の肉さぁ～、全部、全部残さずに食べてよね～！俺、死ぬんなら、喘に喰われてさ、糧になりたいの～！！！」

あー、駄目だ、コイツ・・・ここまで痛いコだったのか？

ネクロフィリアなうえに、俺に、喰われたい？馬鹿げてる。

Ｍなのか？いや、それはない。死体に関してはこいつは、俺がドンびく程、酷い扱いして愉しむやつだからな・・・縛ったり、抉ったり、ヤッテル事は、死者にとっては恥辱の極みだ。ありえね。

「ね～！喘！食べてよ！ねぇ！」

「俺に、そんなキモい趣味はねぇーよ！」

「なんで～！」

「黙れ、死ね！」

散々だ、マジで疲れる。この餓鬼、扱いが難しい。

オセロ。

白と黒、ソレは大差ない様で、全く違うものだ。

例えば、コイツのように。

陸は、ネクロフィリアだ。要するに、死人に性欲を感じる。

死体に恋をして、屍を愛する。

いつかの、毒林檎の話の王子サマのように。

俺は、自分のために人を狩る。

殺人こそが悦楽。存在価値だからだ。

だが、陸は違う。

殺す術を知らない。

屍を愛して感じるくせに、殺す事を知らない。

そう、まるで白痴。

生まれたばかりの赤ん坊だ。

対して、俺は、

生かしておく術が解らない。理解できない。

成長しすぎて自分をもて余す餓鬼と同じだ。

『知らない』

と

『理解できない』

似て非なる事柄。
陸は、殺す術を知った俺に、生かすことを解らない俺に。
「新しい玩具が欲しい」
と、綺麗な笑みを浮かべて
ねだるんだ。
こんなに怖くて引き摺り込まれるモノを、
俺は知りたくない。
結局、成す術もなく、
人を殺す事を止めない。
死人を愛することを止めない。
俺達は、二人でやっとマトモになれた筈なのに！
灰色と　云う
色を
見いだせずにいる。

ハウンドコール。

獣は唸り声をあげて、
威嚇をする。
縄張りを守ろうと必死だ。
僕のよく知る獣は、
縄張りを持たない。
唸らない、吠えない。

喘。
殺人鬼。
僕の相方。
獣の様に躍動する、人間。

「喘〜。」
喘は、独りで夜中に
出歩く。

僕が、玩具が欲しいと言った日は、特に帰りが遅い。
人は、死ぬと朽ち果てていく。

哀れなもんだ。可愛いね。
でも、綺麗に血液を抜いて
防腐剤を射れてやれば、
ま、通常よりはもつよ。

喘は、それを独りでやってるんだ。

何故なら自分しか信じた事がないから。
結局ぼくは萱の外。
餌を待ってるペットだ。
野生にはならない。
成れない。

群を成す獣と、
たった一匹で、行動する。
獣。

喘は後者だ。
咬みつき、もぎ取り、
牙を剥く、死せるその時まで　眠れぬ夜を過ごす。
臆病で、恐れを知らない。
喘の嫌いなものが
あるとすれば…

『集団』

喘は、馴染めない。
社会に。

光に。
人間、に。

僕だけが、飼い慣らすことができる。

猟犬。

玩具専用の、ね。

今日は暇だったから、
むかえに来たよと
名前を呼べば。

獲物をくわえて。

すぐそばに。

ナイフ。

歓楽街。

俺は今、こんなところに居る。

香水と化粧の匂いが、充満している。

えげつない程のネオンの灯に、目眩がする。

……うぜぇ。

そして、

生臭ぇ。

日本人の臭いは生臭い。

同族嫌悪だ。

土地柄が体臭に比例する。

民族なんて、糞食らえ。

鼻が曲がるニオイに顔をしかめて、コートのポケットからバタフライナイフを取り出す。

今日、相方から久々に、注文が入った。

無論、オモチャだ。

ターゲットは３０代～４０代前半のリーマン。
何で、よりによって中年なんだよ。
女の方が良いだろうが、普通なら。
胸のデカイのとか、
ケツのちっせーのとか、
美人とか。
色々あんだろ？
さっさと終わらせたい。
俺の独断と偏見により、
できるだけ抵抗しなさそうなヤツを探す。
何しろ、今日はバタフライナイフで仕留めるから、
ある程度、ナヨいヤツがいい。
ガチムチ野郎は、たぶん抵抗する。
陸は、『できるだけ綺麗な形で残してねぇ～』
と言っていた。
体に銃痕を遺すと、嫌がるだろうからな。
たまには、こうゆうのも
悪くねぇよ。

苦しまないように　急所を一発で切り裂けば良いだけの事だ。

裂けたトコは血が抜けたら綺麗に縫い合わせて、
最後に防腐剤をいれる。

慣れたもんだ。目を付けたヤツが店からでてきた。
かなり酔ってる。

こうなったら、
路地裏まで引き摺って来るのは簡単だ。

相手に道を教えてほしいと嘘を吐いた。

こんなブービートラップに引っ掛かるなんて、
阿呆だな、この男。

あとは、引き摺り込んで、喉笛をカッ切る。

返り血を浴びないように
気をつけて。

おやすみ。
ありがとう、オモチャ。

ノイズ。

喘が、帰ってきた。
玩具を真っ黒いワゴンに乗せて。
僕は、受取人。
これから始まるのは、雑音の協奏曲。
「おかえり～！オモチャはどんな子？」
ペラ、と屍にかけられたブルーシートをめくる。
うん、体はともかく、顔は好みだ。
もちろん、血の気は通っていない。
とりあえず、部屋まで運ばないと、遊べない。
「喘、手伝って～」
殺人鬼に声をかける。
人の姿をした鬼は、素直に僕の言う事を聞いてくれる。
こんなに愉快な鬼がいていいのだろうか？
ちょっとは反抗してみせなよ、鬼なんでしょ？
喘には、僕を殺す武器だって、体力だって有り余ってるのにさ。

確実に仕留めるんでしょ？
なんで、僕なんかの言う事聞いてくれるの？
「うっせーよ！糞餓鬼が・・・運んでやるからお前は部屋で待ってろ！」
喘が運んでくれるというのだから、大人しく待つしかない。
体力は温存するのが、僕にとっては、最善の策。
僕は飼い犬だから。
死体を運ぶのは霊安室。
僕らがアジトにしているのは、みすぼらしい廃病院だからね。
そしてそれは、死者への、最大の冒涜だ。
「喘、この子さ、どうやって遊んであげたらいいと思う～？」
ベッドに死体を寝かせてから、あえて尋ねてみた。
「さあな・・・お前の好きにしろや、玩具なんだろ？ソイツ」
ハッ！と鼻で笑って、喘は答える。
強いね、君はさ。
強靭な肉体、精神力、自我。
僕にはとても、手に入れられそうにないモノばかりだ。
「じゃ、赤い紐でラッピングしようかな？このコさ、肌白いし～」
渦巻はじめた、黒い感情にフタしておどけてみる。

「つくづく悪趣味だよな、オメェーは・・・吐きたくなる」
それもいつかは、無駄になるかも・・・

こうやって、君の声を聞くだけで、
殺したくなるほどの悪寒が背中を走るんだ・・・
騒音でイラつくのと同じように、ね。

「ひもで縛ってから、切腹、とか？」

「やめろ、気色わりぃ！」

いまは、まだ、

「あはは～、冗談だって～」
このままがいいな。

フィルム。

もう、何年も前の――。
擦りきれた、走馬灯。
夢うつつ、あの頃に戻れた気がした、だけ。
『若、善様！』
なんだよ、うるせーな。
『さ、起きて下さい』
わかった。着替えたら直ぐ行くから。
『かしこまりました、では後程…』
何度でも、願ってしまう。悪い癖だ。
デカイ武家屋敷が、俺の生家。
沢山の漢達がいた、懐かしい場所――。
そして、二度と帰る事のできない、幻の場所。
大広間の襖を開ける。
『善坊、誕生日おめでとう！』

ありがとうな、俺なんかの為に……。

『何を水臭い事を、野暮ですよぉ、善様。』

『善坊、まぁ座れや、ほれ、御前さんが大好きなもんだ』

流阡堂の……酒饅頭じゃねえか！高いのに、良いのか？

『遠慮は要らねぇ、たんと食いな！』

『全く、ケーキより酒饅頭が好きなんて、爺くせーガキが居たもんだよぉ』

『そうだなぁ、お前ら！』

がははは…と、地鳴りのように腹に響く笑い声が、何より好きで、安心できた。

煙草の匂い、酒の匂い、男臭い――良い場所だった。

例え、それが……

後ろ指さされる輩の集まる処だったとしても、だ。

俺は、ある極道の一派の

跡取りだった。

お袋は、俺を産んですぐに死んで、

親父も末期の癌で、

俺が九つの時に逝っちまった。

それからは、組の男達が
俺の親代わりだった。
組員の女房たちも、俺にとても良くしてくれた。
学校の行事で遠足があるときは、弁当を作ってくれた。
授業参観日に
運動会、果ては文化祭。
どの行事も誰か必ず入れ替わり立ち替わり。
本当の子供のように、叱って、抱きしめてくれた。
頭のキレる奴等は、家庭教師の代わりとして勉強を、
――なぁ、このXにはいるのは？
『8です。』
じゃあ、これは？
『……何故、数学を教えている時に、古典なんですか、若様?!』
体力に自信のあるヤツは、俺を鍛え上げてくれた。
『善坊、もうギブアップかぃ？』

――お前の体力は、バケモン並みなんだよ！

『おやっさんと違って、モヤシみたいだもんなぁ？』

……舐めとんのかワレェェ！

『怒鳴る暇あんなら、かかってこんかい、ホレホレ』

時に、いきりたたせ、
宥め、諌めて。

血は繋がらなくとも、幸せだった。

ずっとこのままだと、思い込んでいた。

あんなことに、なるまでは……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9514z/

黒い雨

2012年1月10日00時51分発行